

Title	Factors for Improving Satisfaction with Oral Functions in Japanese Adults Having a Regular Dentist
Author(s)	石原, 博人
Journal	歯科学報, 116(6): 502-503
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10130/4164">http://hdl.handle.net/10130/4164</a>
Right	
Description	

氏名(本籍)	いしはらひろひと 石原博人 (千葉県)
学位の種類	博士(歯学)
学位記番号	第1692号(乙第713号)
学位授与の日付	平成18年11月8日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	Factors for Improving Satisfaction with Oral Functions in Japanese Adults Having a Regular Dentist
論文審査委員	(主査) 松久保 隆教授 (副査) 石井 拓男教授 山田 了教授 山根 源之教授

## 論文内容の要旨

### 1. 研究目的

成人における口腔の満足度を調査した結果によれば、歯の喪失が起り始める40歳台から不満を感じる人の割合が高くなるといわれている。そこで、成人の口腔機能の満足度を示す項目のうち咬合・咀嚼機能、嚥下機能、発音、外観を本研究の課題とした。それぞれの満足度を“満足している”および“満足していない”の2群間に分け、成人における口腔の満足度に口腔状態(現在歯数、健全歯数、CPIコード、歯根面う蝕経験)、かかりつけの歯科医や定期的健診の有無がどのように関連しているかを統計学的に解析した。

### 2. 研究方法

本研究は、平成10年度に千葉市によって行われた歯科疾患実態調査結果を用いた。対象者は20歳～60歳台までの成人1,899名(女性1,024名、男性875名)で、10歳間隔に分けて検討した。健診前に受診者には研究目的の同意を得て行った。4つの満足度に“どちらともいえない”や無回答のものは解析から除外した。口腔の満足度は、咬合・咀嚼機能、嚥下機能、発音、外観に対する自己評価を“満足している”および“満足していない”の2群間に分けた。4つの満足度に関係する要因としてかかりつけの歯科医と定期的健診の有無、口腔の状態として現在歯数(24歯以上と24歯未満の2群)、健全歯数(15歯以上と15歯未満の2群)、歯根面う蝕経験歯数(有無)およびCPI個人コード(3以上と3未満の2群)を用いた。対象者の4項目の満足度に対する7項目の関連をロジスティック回帰による年齢・性別調整オッズ比で求めた。なお、喫煙と飲酒は現在歯数や歯周疾患罹患に影響を与える因子であることからロジスティック回帰の調整のために用いた。これらの解析には、Windows版SASシステムVer. 8.2を用いて統計処理を行った。

### 3. 研究成績および考察

咬合咀嚼機能に満足していない者の割合は、男性で40-60%であり、女性は男性より低い割合であった。嚥下に満足していない者の割合は、他の3つの機能のうち最も低い値であり、男性で20-28%であり、女性では9-18%であった。発音に満足していない者の割合は、男性で25-45%であり、女性では22-33%であった。外観に満足していない者の割合は、男女ともに50%であった。口腔の乾燥感の対象者の30-46%であり、男性が女性よりわずかに高かった。かかりつけの歯科医は95%以上の対象者であると回答していたが、定期的健診を受けているものは10-35%であった。一人平均現在歯数、一人平均健全歯数およびCPI個人コードの割合は、1999年の東京都が行った歯科医院患者調査結果と同じであった。歯根面う蝕経験がある者の割合は5-30%であった。

咬合咀嚼機能に満足していないことに対する性・年齢調整後のオッズ比で有意に関係しているのは現在歯数(24歯以下), 健全歯数(15歯以下), 定期的健診(無)およびCPIコード3以上であった。嚥下機能に満足していないことに有意に関係しているのは現在歯数(24歯以下), 健全歯数(15歯以下), 定期的健診(無), かかりつけ歯科医(無), CPIコード3以上であった。発音に満足していないことに関係しているのは現在歯数(24歯以下), 定期的健診(無)であった。外観に満足していないことに関係しているのは健全歯数(15歯以下), CPIコード3以上および定期的健診(無)であった。現在歯数(24歯以下)は外観以外の3つの満足度に関連し, そのオッズ比が最も高かった。

#### 4. 結 論

成人患者における口腔機能の満足度は, 現在歯数, 歯周疾患, 定期的健診の受診および健全歯数に強く関連していた。本研究結果は, 歯科医院での定期的健診を推進し, 健全歯数や現在歯数を維持し, さらに歯周疾患をコントロールすることは, 患者の咬合咀嚼機能や嚥下機能の満足度を上げることに大きく寄与することを示した。

### 論 文 審 査 の 要 旨

成人における口腔の満足度を調査した報告によれば, 歯の喪失が起り始める40歳台から不満を感じる人の割合が高くなるといわれている。高齢者の口腔状態と口腔機能の満足度との関係を追及した研究は多いが, 成人において口腔の状態やかかりつけ歯科医や定期的受診状況が口腔機能の満足度とどのように関係しているかの報告は少ない。本論文は, 歯科医院に受診した成人患者を対象とし, 歯および歯周組織の状態, かかりつけ歯科医および定期的受診の状況が口腔機能の満足度にどの程度影響しているかをロジスティック回帰による年齢・性別調整オッズ比で求めたものである。その結果, 成人においても現在歯数や健全歯数の維持, 歯周疾患の予防, さらに定期的健診の受診は患者の口腔機能の満足度の向上に大きく関係していることを示唆した。

本審査委員会では, 1) 論文表題について, 2) 対象者の回答肢の取り扱い, 3) 統計分析前の関連要因の群分けの根拠, 4) 考察の簡略化, 5) 用語の妥当性などについて質疑がなされたが, 概ね妥当な回答が得られた。また, 論文内容について多くの要望がなされ, それぞれに対応した統計解析および修正を行った。その結果, 本研究で得られた知見は, 歯学の進歩発展に寄与するところ大であり, 学位授与に値するものと判定した。